

学校課題研究計画

1 研究主題 「自分の思いや考えを、自分の言葉として話すことができる児童の育成」

2 主題設定の理由

(1) 学校教育目標から

本校では「ふるさとを忘れない 世界の中の日本人」を指標とし、「ふるさとのよさ」を自覚し、そのよさを守り育てていこうという気持ちと実践力を育てながら、21世紀の国際社会を生きる日本人の育成を目指した教育を行ってきている。また、学校教育目標「美しさのわかる やさしい子ども」「よく考え 勉強する子ども」「健康で たくましい子ども」の達成を目指し、全教職員共通理解のもと、一人一人の児童のよさを認め、伸ばし、自己実現を目指すことができるよう教育実践に努めている。

その中でも「よく考え 勉強する子ども」における目指す児童像として「人との関わりの中で、考え方を広めたり深めたりし、学び合いができる子」を掲げ、人と関わる中でコミュニケーション力を高めるとともに、多様な他者と協働して課題を解決できる児童を育成することを重点的取組として挙げている。これは、本校が取り組んでいる「自治力」の育成とともに、自己形成に直接つながる重要な取組の一つであり、全ての教育活動のベースになっていると考えられる。

人と深く関わるためにには、望ましい集団育成を重視していくことが大切であり、その望ましい集団を育成するためには「話合い」が大変有効である。意見を聞いてもらえるということは、受け入れられているということであるから、まずそこで自己存在感が生まれると考えられる。さらにそのような相互活動の中で共感的な人間関係が構築され、自己決定をその集団の前で表明したり、みんなで集団決定したりしていく態度が育成される。また、話合い活動の場で、自分の考え方や思いを真剣に伝えたり、他者の多様な考え方を聴いたりすることによって、自分の考え方を改めて見直し、再構築することができる。この過程を繰り返していくことで自己形成が促されると考える。

昨年度はこれまでの取組を継続しながら「しっかり聞き合い、真剣に話し合う」言語活動を通して、一人一人の自己形成を促すとともに、自分の思いや考えを伝え合い、自分の考え方をより深めることができる児童の育成を目指してきた。研究を続けることで児童の変容が見られてきた。そこで今年度は、昨年度までの取組をもとに、これから時代に必要とされるプレゼンテーション能力を高めつつ、話合い学び合う活動で「考えたこと」を「自分の言葉として話すこと」、「聞く質を高めること」を目標とし、本主題を設定した。

(2) I C T機器を活用した学び合いの関連から

コロナ禍に伴うネット関連の使用拡大、GIGAスクール構想での児童のタブレット機器の活用に伴い、児童や教員のI C T機器活用のスキルアップをするとともにI C T機器を活用した授業実践を行うことで、児童が視覚的に分かりやすく学習内容を理解し、自分の考え方をもつことができると考えた。特に、タブレットを組織的・計画的に活用し、今までの取組で育むことができた「話すこと・聞くこと・共感すること」を重点的に捉えながら、学習意欲の向上とプレゼンテーション能力の育成を図ることをめざす。また、I C T機器を効果的に活用した授業の実践に必要なI C T機器の活用スキルアップのために、普段の授業や朝の学習、集会等での積極的な活用を行い、よりよい学び合いができる力を育成したい。

(3) 昨年度までの取組と本校児童の実態から

本校は、全学年単学級という小規模の学校である。児童は、素直で伸び伸びと生活しており、異学年での交流も盛んである。人数が少ないため、高学年児童の多くは様々な場面でリーダーとして活躍しているが、一方で、発言力のある児童が固定化してしまうという問題点も見られる。

昨年度までの取組では各教科や様々な学校行事、毎日の朝の会等で、人前で発表したり、自分の考えを述べたりする活動を多く取り入れてきた。また、道徳の授業において児童が自ら考え、主体的に学習に取り組めるよう、発問や学習形態を工夫したり、道徳ノートを活用したりしてきた。その結果、人前で発言できる児童が増えただけでなく、一人一人が自分なりに考えたり、友達の発言を聞いて考えを広げたりする様子が見られた。しかし、友達の考えを聞いて深めた自分の考えを順序立てて話したり、選んだ理由について根拠を基に述べたりすることには依然として課題がみられる。

そこで今年度は、昨年までの取組を継続し、授業の中でＩＣＴ機器を効果的に活用しながら、言語活動の充実を図るとともに、「聴く質」を高め、話し合いや学び合いの中から多面的な見方、考え方ができるようにしていきたい。話し合い、学び合う場面を意図的に設定し、自分の思いや考えを自分の言葉で伝え合うことができる児童の育成につなげていきたいと考えた。

(4) 小中連携事業から

本校と吹上小学校、吹上中学校の三校と地域が連携して学力向上を目指して取り組むなど、吹上地区全体で児童生徒の育成を目指してきている。また、それぞれの学校の児童生徒の実態から、自分の考えを積極的に伝え合うことを共通の課題として取り組んでおり、成果や課題等についても互いに考察できるようにしてきている。その中で本校では特に「聴く質を高め、自分の考えをより深める」こと、それを「自分の言葉で発表できること」を重点的に取り組んでいくこととし、研究主題を設定した。

3 研究目標

授業の中で、ＩＣＴ機器を効果的に活用し、児童の考えや活動内容を視覚的に分かりやすく映像等で提示することで、児童が友達の意見や考えを捉えやすくなる。そして、学び合いの中で、学びが深まる「聴き方」について考えさせ、実践し、深まった自分の思いや考えをさらに伝え合うことで、自分の考えをより深めることができる児童の育成を目指す。

4 目指す子ども像

自分の思いや考えを、自分の言葉として話すことができる子ども

～人との関わりの中で、考えを広めたり深めたりし、学び合いができる子～

- 《具体像》
- ・自分と異なる意見であっても聞き入れることができる。
 - ・友達と異なる意見であっても発言できる。
 - ・自分の考えを自分の言葉で発言できる。

5 研究仮説

ＩＣＴ機器を授業の中で効果的に取り入れ、児童が視覚的に分かりやすく授業の内容や友達の意見を理解することができるようになる。また、どんな発言も受け入れる学級の雰囲気づくりを大切にすると共に「聴く質を高めること」で、自分の思いや考えを深め合い、自分の言葉として話すことができる児童の育成が図れるのではないかと考えた。

6 研究内容

(1) ねらいを明確にした分かる授業

児童一人一人に「学ぶ力」を育むために、教師が学習の目標を明確にし、目標を達成させるための指導及び指導に生かす評価という視点を重視すること…下都賀地区学校教育の重点より

- ・児童の実態を踏まえて、身に付けさせたい力を確認する。
- ・単元計画における本時の位置付けを確認し、ねらいの提示の仕方を工夫する。
- ・振り返りを工夫し、次の授業に活かせるようにする。

(2) 児童が発言しやすい授業の工夫～学びのUD化～

この研究は、研究目標にも掲げている“児童一人一人が発言しやすい授業の工夫”そのものであるとともに、栃木市学校教育の重点項目3-①「とち介の学び」による授業改善と学業指導の充実、②一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の充実に繋がる重要なものである。児童一人一人が安心して学び、自分の思いを伸び伸びと発信できるような授業づくりをしていくため、特に下記の点について研究を進めていく。

- ・自ら考えたくなる発問の工夫
- ・思考ツールの工夫（ＩＣＴ機器の効果的な活用、付箋、ペア・グループ活動での話し合い等）
- ・書く時間の確保、ノート指導、ワークシート等の工夫

(3) 共感的人間関係を育み、聴く質を高める指導の工夫

共感的人間関係とは、相互に人間として無条件に尊重し合う態度で、ありのままに自分を語り、理解し合う人間関係のことである。集団の中で自分の思いを発言できるということは、その集団において共感的人間関係が成り立っているということであり、その共感的人間関係を育むことが本校の目指す子ども像「人との関わりの中で、考えを広めたり深めたりし、学び合いができる児童」の育成にもつながると考えられる。

そこで、本校では朝のスピーチや各集会での様々な発表、縦割り班（ワールドグループ）での話し合いの場面における聴く活動とその指導を通して、友達の発表を温かく受け入れ、尊重し合える共感的人間関係を育んでいきたい。さらに聴くだけに留まらず、うなずいたり質問したり積極的に聴く態度やより多面的に聴くことができる力を育成していきたい。

(4) 日常的な言語活動と言語環境の整備

- ・読書の推進（朝読書・多読賞・各学年の読書目標達成賞、家読等）
- ・音読の日常化（授業での音読指導・家庭学習での音読の習慣・音読月間等）
- ・朝の会でのスピーチの工夫（発達段階と学級の取り組みに応じて）
- ・辞書やタブレットを活用し、語彙を増やす。

- ・デジタル新聞教材を使うことで、時事問題や季節の行事など一般常識に対する考えを深めていく。
- ・低学年を中心に、MIM を行う。MIM（読み）については、プリントで実施し答え合わせすることで語彙を増やす。デジタル MIM（読み）の活用も継続する。併せて MIM（算数）も行い、数の概念と言葉をつなげていく。
- ・「話し方名人」「聴き方名人」を提示し、学びあう力の向上を図る。

(5) 指導力向上のための研修の充実

- ・授業研究会の実践・工夫…指導案検討会や事後の授業研究会を通して、教師の指導力向上を図る。
 - ・教師の I C T 機器活用のスキルアップのための研修を行い、授業に役立てる。
- また、I C T 機器を使って活用してみたい指導方法の紹介を積極的に行う。

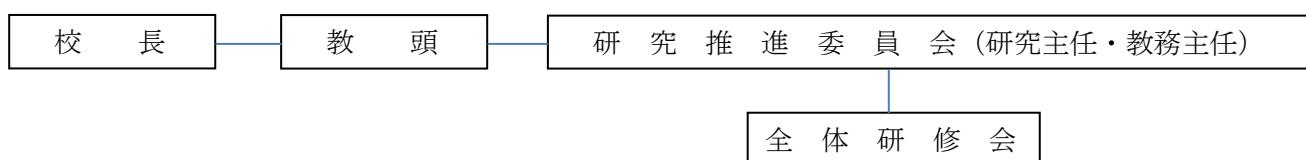
7 研究方法（研究授業の実践）

- ・一人一授業を行う。
- ・授業研究会による意見交換や、各自の取り組みの検証・まとめを行うことで、ねらいの明確化や児童が発言しやすい発問や授業の工夫、指導力向上のための研修の充実について研究を進めていく。

8 研究計画

月	主　な　内　容
4	研究主題の確定・確認及び年間指導計画作成
5	指導法の研究
6	校内授業研究会①②
7	校内授業研究会③④
9	L G B T 授業⑤（人権）
10・11	要請訪問（授業研究会）⑥
12	学校評価（教職員、児童：実践の検証）
1	1年間の実践のまとめ・次年度の課題の検討

9 研究組織



10 まとめ

- ・12月の学校評価の中で、児童、教職員対象のアンケートを行い、実践の検証を行う。
- ・1月の現職教育で学校課題のまとめを行い、次年度の取組に生かしていく。